



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 **白駒妃登美**

三河国みかわのくに（現在の愛知県東部）の岡崎城主・松平広忠ひろちかの子として生まれた家康は、二歳の時、母・於大おおたいの方と生き別れになります。於大の方は政略結婚で松平家に嫁ぎましたが、彼女の実家が、松平の主君・今川氏と敵対する織田氏に従ってしまったところから、急転直下、離縁となったのです。当時

✿ 歴史をつくった母性愛

どんな偉人にも、その命を授けた母親がいて、歴史に刻まれた偉業の裏には、知られざる母親たちの存在があります。当代随一の儒学者となり、近江聖人おみみせのじんと称えられた中江藤樹なかつかとうじゅと、徳川二百六十五年の礎を築いた徳川家康とくがわいえやす。二人の共通点は、ともに十七世紀の同じ時代を生きたこと、もう一つ、幼い頃から母と離れて育ったことが挙げられます。

藤樹と家康を育てた母の慈愛

離れていても伝わる

の政略結婚は、両家が同盟関係を結ぶことを意味しますから、その同盟が解消されれば、妻は実家に帰されるのです。その後、於大の方は、実家の意向で他家に嫁ぎ、三男三女をもうけます。けれども彼女は、松平家に残してきた幼い息子のことを、片時も忘れませんでした。離れていても、家康と絶えず音信をとり続け、折に触れてお菓子や衣類などを差し入れしたそうです。そのころの家康といえば、今川氏のもとで人質暮らし。自身の無事を祈り続ける母の愛情に、どれだけ癒されたことでしょう。今も昔も、才能はありながらも異性関係でつまずき、大成できない人って、結構いますよね。その点、家康には常軌を逸した女性への執着が見られません。おそらく家康は、母親からいつも愛されているという安心感に包まれていたんでしょうね。この



於大の方
(1528-1602)

徳川家康の母。晩年は伝通院と称した。出生地の東浦町では「於大公園」が整備され、毎年「於大まつり」が催されている。

藤樹の母
(生没年不詳)

農業を営む中江吉次と結婚し、長男として藤樹を生む。

【イメージイラスト】
アオジマイコ